

<校訓>
高志共生

大庄中通信

大庄中学校
H25年度第14号
(H25.10.8・火)

ミュージカル「オズの魔法使い」を鑑賞

先週の金曜日（10月4日）、「劇団ポプラ」によるミュージカル「オズの魔法使い」を鑑賞しました。これは、文化庁が行っている「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」という、一流の文化芸術団体が学校や個人の負担はなしで、小中学校で合唱・オーケストラ、演劇、ミュージカル、歌舞伎などの舞台芸術を公演してくれるという事業です。30名近い保護者の皆様も一緒にご覧になっていただきました。ありがとうございました。



「劇団ポプラ」は、1978年（昭和53年）に結成された、名作ミュージカルを小中学生や青少年に上演することを通じて、演劇の楽しさや夢、心に残る感動を伝えようとして全国を巡回公演している東京都に本部を置く劇団です。これまでも、「赤毛のアン」や「火垂るの墓」をはじめ、数多くの名作のミュージカル公演を行っています。

こんなお話

「オズの魔法使い」は、世界的ベストセラー小説（原作：ライオン・フランク・ホーム）を題材にしたミュージカルの傑作で、1939年に映画化され、アカデミー賞の作曲賞・歌曲賞・特別賞などを受賞しています。日本では、1954年に公開されました。

アメリカ・カンサス州の農場の小さな家で、両親を早く亡くしたドロシーは叔父と叔母夫婦に育てられ元気に暮らしています。ある日突然、大きな竜巻がドロシーの村に襲いかかり、家ごと空へ巻き上げられ、異次元の世界に紛れ込んでしまいます。気がついたドロシーが目にしたのは、不思議な光景でした。親切な魔法使い、ドロシーの「農場に帰りたい」という願いに、エメラルドの都へ行って何でも願いをかなえてくれる魔法使いのオズ大王に会うようにと教えます。ドロシーは、旅の途中で会った、「脳みそのないカカシ」「心のないブリキ」「臆病なライオン」を仲間にして旅を続けます。様々な困難が待ち受けますが、最後は、それぞれに願いを叶えることができる…そんなお話でした。

本校生徒も共演

プロの役者さんの表情やセリフから伝わってくる表現力や迫力、踊りながら息を切らすこともなく歌ってセリフをしゃべることができる身体能力には、本当に感心させられます。また、共演してくれた本校の生徒会執行部の人、演劇同好会の人、川脇先生などのミュージカル俳優になりきった演技もとても素晴らしくて、プロの役者さんと一緒に舞台にいても違和感が全



くありませんでした。

名曲の素晴らしさはもちろん、カカン・ブリキでできた人間・しゃべるライオンなど、実在しないキャストを通して、「心」や「知恵」や「勇気」といったことの大切さを伝えてくれるミュージカルでしたね。

さあ 合唱コンクールだ

23日（水）の合唱コンクールまで、2週間と少しとなりました。今年の合唱コンクールでは、どんな素敵な歌声を響かせてくれるのだろうか…そんな期待がいっぱいです。

合唱には感動を届ける力がある

私は、合唱コンクールほど練習の成果がはっきりとする行事はないと思っています。

一人一人の顔が違うのと同じように、歌うことの得意不得意や声の大きい小さいは一人一人違います。歌うことに対する好き嫌いも違うでしょう。しかし、合唱は、数分間のたった一つの歌を歌うために、全員が心一つにすることで、聴く人に感動を届けることができる不思議な力を持っています。「スポーツの力」が、スポーツをする人にも、スポーツを観る人にも、スポーツに関わる人にも感動や力を与えてくれるのと同じように、合唱や音楽にも感動や勇気を与えてくれる不思議な力があります。合唱コンクールは、中学生が自分の学校の中で、「合唱の力」を経験する当事者になれる行事でもあると思っています。

どのクラスにも音楽の専門家はほとんどいません。それでも、コンクールでの栄冠をめざして全員が一生涯懸命練習することで、練習するまでは出なかった声が出るようになったり、大げさに言えば不可能を可能にする経験ができます。クラスが一つにまとまって、心の震えるような感動を人に届けることができる、合唱コンクールは、そんな経験ができる行事だとも思います。



練習から本気で取り組む

合唱がうまく行くかどうかは、本気になって歌っている人が何人いるか、ということで決まると思います。口を開けてない人、笑っている人、ふてくされたような態度の人などがいる合唱は、その時点で論外です。また、合唱コンクールは、地声で歌う大声コンテストではありません。大庄中学校の合唱は、そういった低レベルの段階は終わっていると思っています。

歌詞を覚える、他のパートにつられないように自分のパートの音を覚える、口の中を大きく開いて歌う（あくびをするように喉（のど）を開くとかも言いますね）、お腹に息をしっかりと吸って声を出す、客席の一番後ろまで声を飛ばすつもりで歌う、笑顔で歌う…などといった合唱の基本や合唱のツボみたいなことが当たり前でできていなければ勝負にならない、そんなハイレベルな合唱コンクールを期待しています。もちろん、クレッシェンド・デクレッシェンドとか音の伸ばすところや止めるところ、ハーモニーや表現なども意識しながら、歌詞にある歌の心を表現してくれて、魂とか想いが伝わってくるような合唱が聴けたら最高に嬉しいなと思っています。

「本番はちゃんとやるから…」ではダメです。何度も何度も繰り返して練習して、「練習したことが本番で出せたら大丈夫」という心境になるまで、限られた期間ですが、各クラスで練習に取り組んでほしいと思います。

(文責:校長 福井 隆夫)